

# 戦国末期における木舟城と城下町の復元研究

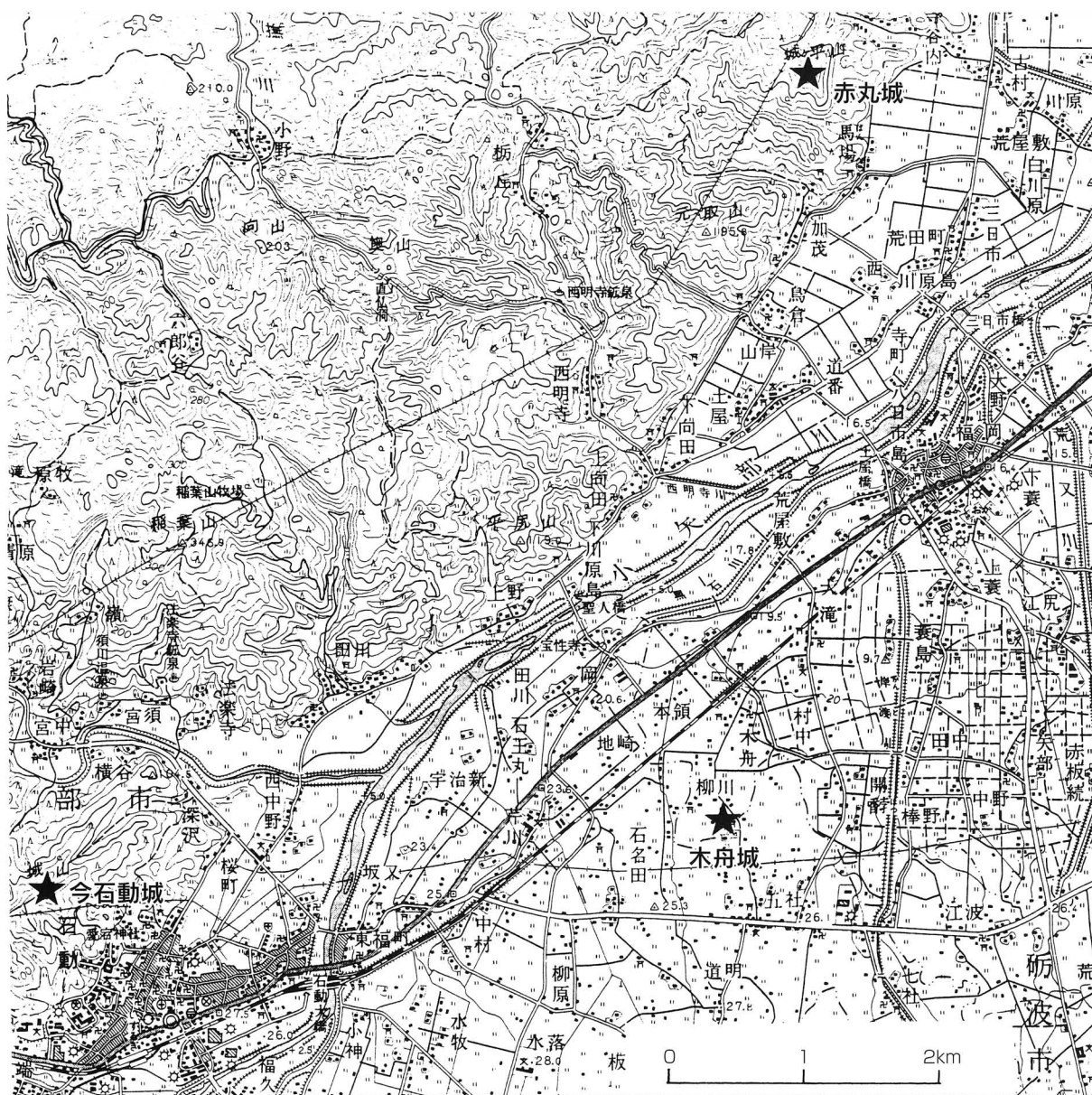
## －国人石黒氏の盛衰と城下町の様相－

富山県教育委員会 文化財課 高岡 徹

### 一 はじめに

越中西部の木舟城（現福岡町）に居城した石黒氏は、戦国期を通じ砺波郡の有力国人として成長した。石黒氏は天正9年（1581）に滅ぶが、城と城下町も同13年の大地震により壊滅的な被害を受け、翌年城主前田利秀が居城を西方の今石動城（現小矢部市）に移転すると、城下町もやがて消滅した。

現在、城跡は県指定史跡としてわずかな微高地を残すのみで、周辺も過去の圃場整備により遺構を



第47図 木舟城と周辺の城郭

とどめない。特に城は天正の大地震により地中に沈んだとも伝えられ、その規模や構造、特にプランについては不明な点が多かった。

筆者自身、木舟については『日本城郭大系』（昭和55年）の執筆以来、長らく積極的な調査研究を怠ってきた。それは地震による「壊滅」という思い込みが強かったせいでもある。ところが、近年木舟周辺で行われた能越自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、戦国末に繁栄を迎えた城下町跡が次々に姿を現わした。また、平成8年、地元福岡町が木舟城跡の史跡整備をめざす調査検討委員会を設けた際、筆者も委員の一人として木舟城のプラン復原を試みる機会があった。その過程で今後の木舟城下町研究の推進のためにもこれらの成果を一度とりまとめ、自分なりに城と城下町の様相を明らかにしたいと考えるに至った。

越中の場合、戦国期の城下町研究はほとんど本格的に行われていない。筆者は以前、願海寺や増山でおおまかに城下（町）の景観復原を試みたことがある<sup>(1)</sup>。段丘上の増山を除くと、平野部では願海寺の一例だけである。これは平野部が圃場整備の早期実施で旧地形の復原を困難なものにしているためでもあるが、研究者自身の消極的姿勢も一因と言える。国人の城下町がいかなるものであったのか、その様相を明らかにしていくことは国人の権力基盤の根底を浮きぼりにすることであり、地域の戦国史解明のためには不可欠の作業と言わねばならない。

本稿では、以上の点をふまえ、まず国人石黒氏ら城主の盛衰をたどり、木舟城の歴史を概観する。次に地名や古図などから木舟城とその城下町のプラン復原を試み、戦国末に砺波郡の政治・経済上の中心拠点であった木舟の実態解明を図りたい。

## 二 木舟城主石黒氏の盛衰

石黒氏は古代の豪族砺波臣氏に出自すると伝え、当初は医王山東麓の小矢部川流域に広がる石黒荘を本拠地とし、平安末期以降、有力武士団を形成した。そして、源平合戦においては石黒太郎光弘が木曾義仲に与して平家方と戦っている。その後、庶家筋にあたる一系統が小矢部川中流域の木舟に進出し、同地に城館を構え、やがて砺波郡の有力国人として成長する。これが木舟石黒氏である。

では、石黒氏の木舟進出はいつ頃であったのか。各種石黒系図を検討された久保尚文氏によれば、それは南北朝期以前のものと推定されている<sup>(2)</sup>。氏の根拠とされた石黒治男氏蔵「越中石黒系図」では南北朝期の記事にかなり信憑性の高い部分があることから、同系図中の光政の子四郎右衛門政家について、足利（斯波）尾張守高経入道道朝に属し、「貴布祢城」に居城したとする記事はまず信じてもよいようである。ちなみに、この斯波高経の越中守護職在任が確認できるのは康安2年（1362）2月10日の守護斯波高経書下<sup>(3)</sup>である。

ところで石黒氏がこの木舟付近に進出した背景とは何であろうか。この点については、前記系図中の左近丞光清に関して「明応年中恵林院將軍御下向越中国之時在忠功居砺並郡貴布祢城領糸岡郷二十二村」の記事があることなどから、当地に存在した糸岡荘の代官職などを得ることで在地化し、やがて付近一帯を支配するようになったと考えられる。無論、木舟城も当初は居館程度のものだったと推測される。

また、その際、木舟が拠点として選ばれた理由として当時の水陸交通との関わりがある。このうち水上（河川）交通との関わりでは、木舟が小矢部川の右岸に位置し、城のそばを流れる支流によってその小矢部川と結ばれていたことに注目する必要がある。周知のように小矢部川は古来、越中西部の

河川交通の大動脈であり、河口から近い放生津が日本海側有数の港でもあったことから、物資の輸送などにこの水運を利用できる利点は大きかったとみられる。なお、時代がくだった戦国末の天正9年（1581）7月頃、木舟城に籠城していた上杉部将吉江宗閤（宗信）が落城に伴い、海路退去し市振（現新潟県青海町）に着いているが<sup>(4)</sup>、この時の退去のルートも小矢部川を経由するものであったと推測できる。

陸上交通については、現小矢部市岡から木舟・戸出・中田・水戸田を経由し、現富山市追分茶屋に至る北陸道の存在が重要である。砺波平野の北部を横断するこのルートはかなり古くから使われており、寿永2年（1183）の木曾義仲も同ルートを進撃したとみられる。この道は「中田道」・「中田往来」とも呼ばれ、やはり越中西部の陸上幹線道であった。同ルートの重要性は、のちの寛永年間（1624～44）砺波郡の郡奉行所が同ルート沿いの大清水（現高岡市）に置かれていたことから裏付けられる。木舟はこの街道沿いに位置する中世の要衝だったと言える。



木舟へ向かう旧北陸道（現小矢部市岡、東より）

さて、次に南北朝期における木舟石黒氏の動向を見ておこう。前掲「越中石黒系図」によれば、政家の子光雄が応安2年（1369）越中守護で反桃井方の斯波義将に属し、軍功を上げたものの同4年7月16日討死したことが知られる。これに対し、同じ系図で政家の伯父光成の孫光顕と慶範の方は、それぞれ応安2年と4年に斯波氏に敵対する桃井直常方に与して戦ったことが記されている。桃井直常・直信は共に越中の守護を務め、観応の擾乱に際しては足利直義方に立って戦った。

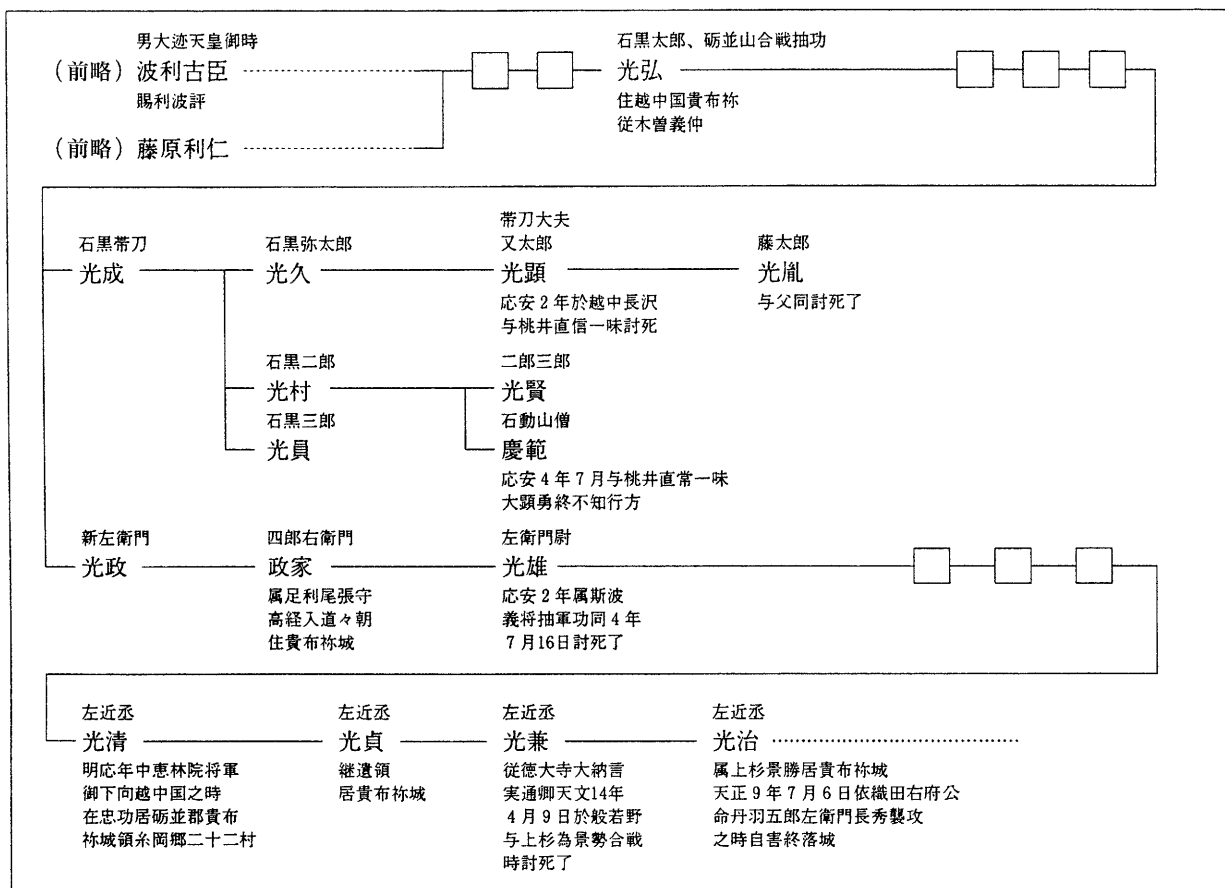
注目されるのは、前記の石黒光雄（木舟城主）と慶範が同じ応安4年7月の戦いに参加している点である。実はこの応安2年から4年にかけて桃井直常の最後の蜂起があり、特に同4年7月28日には能登勢と桃井方の合戦が五位荘で行われている。

(七月) (直常)  
廿二日、自越中国飛脚到来、越中国桃井播州禅門打出之間合戦、両方討死手負数十人、御方勝戦云々、

(七月)  
廿八日、桃井与能登勢、於越中国後位庄合戦、云云、

(八月)  
十二日、去八日夜、桃井引退越中陣之由飛脚到来、<sup>(5)</sup>

桃井直常はこの合戦で敗れ、ついに再起の道を断たれるが、合戦のあった五位荘は木舟に隣接することから、木舟城にも戦火が及んだ可能性がある。系図中では、守護斯波方に属した光雄が7月16日に討死をとげ、一方の桃井方に属した慶範が同じ7月に戦いのあと行方知れずとなっている。前記の「花営三代記」の記事を考えるなら、双方の石黒氏が敵と味方に分かれて戦ったのは、この時の五位荘を中心とした合戦だったと推測できる。そして、勝者である斯波氏に属した系統が木舟石黒氏を継承していくのである。



第48図 石黒治男蔵「越中石黒系図」(久保尚文「越中石黒氏について」所収より高岡作成)

こののち木舟石黒氏は次第に砺波郡の有力国人へと成長し、周辺地域に勢力を広げる。室町・戦国期には別に石黒惣領家の流れをくむ石黒又次郎系が蓮沼（現小矢部市）近辺を拠点としていたが、台頭著しい木舟の成綱（左近蔵人）系がこれを凌駕し、謙信没（天正6年）後一時的に上杉・織田方に分かれ対立するも、やがて又次郎系は木舟成綱系に吸収されていったとみられる<sup>(6)</sup>。このことはのちに佐々成政が足軽大将を置いた蓮沼の館が、はじめは木舟の石黒左近の持城であったと伝えていること<sup>(7)</sup>からも裏付けられる。この館はおそらく当初、惣領家の石黒又次郎系の居館であり、やがて前述の経緯で又次郎系を吸収した木舟成綱系の拠点に転じたものとみられる。

木舟石黒氏のこうした台頭ぶりは、天正5年（1577）12月23日に上杉謙信が管下の将士名簿を書き上げた中に「石黒左近蔵人」の名が見えること<sup>(8)</sup>からも裏付けられる。すなわち、天正5年末の時点ですでに木舟成綱系が石黒氏を実質的に代表する存在とみなされていたことを示している。成綱は天正4～5年、他の国人らと共に越中を制圧した上杉謙信に服属する。この頃が木舟石黒氏の最も安定した繁栄の時期だったとみられる。

「越中四郡古城跡略記」<sup>(9)</sup>（以下「古城跡略記」と呼ぶ）は当時の城主成綱の富裕ぶりと勢力の大きさを次のように記している。

（前略）石黒左近代々在城仕由、天正之時分候、左近<sup>(有徳)</sup>うとくニ御座候、領内之民ヲすくい、近郷之百姓等にも金銀をかし、まいないをつかひし、志たがへ、其上にて近郷へはたらき、一き共を<sup>(探)</sup>たをし候て、取ひろげ申由、（後略）

成綱のこうした富裕ぶりはそのまま木舟城下の繁栄を物語るものでもあった。そこで注目されるの

は、次の史料である（傍点、筆者）。

〔赤丸彦五郎・天九郎米借用状〕

借用申御米之事

合式斗者 たゝし升者木船判にて候、

右此御米者、依有要用借用申処実正也、然者和利者一はい二和利之以算用、来八月中二<sup>(中手)</sup>なかくて米にて相立可申候、若無沙汰仕候者如何様共御催足可被成候、其上にも如在仕候者、忝も如来<sup>(聖)</sup>しやう人様之御はつを蒙り、来世にて者無間二しつミ可申候、仍為後日一筆如件、

赤丸

彦五郎（略押）

同

天九郎（略押）

口入

彦左衛門尉（花押）

天正十二

四月十九日

中山治部左様御上様

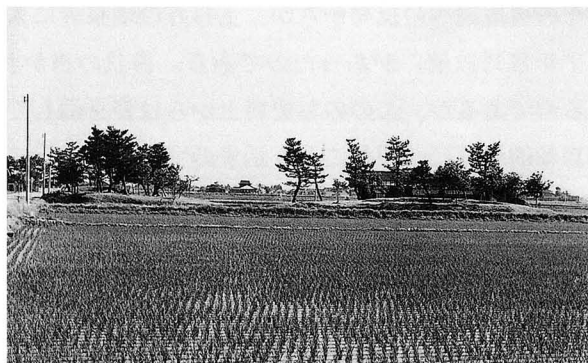
参

これは敦賀市立博物館所蔵の中山文書のうちの一点である。中山文書の内容については、以前の拙稿<sup>(10)</sup>を参照されたいが、簡単に紹介するなら、戦国期に砺波郡赤丸城（現福岡町）に居城した国人中山治部左衛門尉の末裔のもとに伝来した天正年間の米などの借用状である。当時、赤丸を中心に五位荘一帯を勢力下に置いていた中山氏は、春に米を周辺の有力百姓らに貸し付け、8月中旬に利息を付けて返済させていた。前記の天正12年（1584）4月19日の借用状で注目されるのは、「たゝし升者木船判にて候」としている点である。赤丸は小矢部川左岸に位置し、木舟から直線距離で約6kmを隔てるにもかかわらず、「木船判」の升が使われていたのである。ここでいう「木船判」の升とは、石黒氏の本拠地であった木船（舟）を中心地使用された升をいうことから、そこに木舟城下を中心とした一つの地域的な経済圏を考えることができる。とすれば、（石黒氏が滅んだ直後であるが）天正12年の時点で小矢部川を越えた中山氏の本拠地・赤丸付近にまで木舟の地域的経済圏が広がっていたことを確認できるのである。赤丸の中山氏が米などを貸し付けていたのに対し、木舟の石黒氏は前記「古城跡略記」では、金銀の貸し付けを行っており、その富裕と繁栄ぶりをうかがえる。このことは、戦国末期における国人領主の積極的な経済活動の一端を示すものでもある。

しかし、木舟の地にも動乱の時が訪れた。それは天正6年3月13日の上杉謙信の急死に始まる。養子の景勝はその直後、3月24日付で謙信の急死を石黒成綱に伝えている<sup>(11)</sup>。同日付で同じ内容の



木舟城跡を東方より見る（昭和54年撮影）



同、北方より見る

書状が神保旧臣の小嶋六郎左衛門（職鎮）にも送られていること<sup>(12)</sup>からすれば、他の越中国人衆にも同じように伝えられたものとみられる。景勝としては、謙信時代に忠誠を誓った国人達を従来どおり上杉側につなぎとめようとしたわけだが、謙信死去を知った織田信長の対応は早かった。『信長公記』によると、4月7日、かねてより信長のもとにあった旧守護代家の神保長住を召し寄せ、飛驒經由で越中へ入国させたのである。その目的は越中からの上杉勢力の駆逐と織田方による越中制圧であった。そして長住の入国と同時に、織田方による強力な働きかけが国人達に行われた。

この情勢を見た木舟城の石黒成綱の反応も早く、上杉方の瑞泉寺や勝興寺を攻撃して織田方に立ったことを明らかにした。

〔瑞泉寺佐運書状〕

去六月之御礼、今般到来、委細令拜見候、仍貴国平均之御本意、弥属御静謐之由、珍重存候、随而石黒又次郎身上招寄此方、木船二及鉾楯之儀、御不審之由候、愚存非一候之間、具難顯昏上候、  
先年貴府・大坂御和親之時節、爰元之体可為前々姿之旨、太守被露御身血候、然処御他界以後、  
不日ニ相背御置目、石黒左近藏人向此方、相企逆意候、雖然惣別衣体長袖之身上、不及是非之砌、  
石又次、方ヲ令手切、一味可仕之由候つる間、任其意候キ、併東西之体難計存、致遠慮之砌、又  
次郎・左近令入眼、當時在木舟候、雖經年月、対彼方、存分難捨置候条、太守御誓詞之筋目、乍  
恐、預御許容候者、可畏存候、委曲猶花藏院可被申入之趣、宜得御意候、恐惶謹言、

(付箋) 天正七年

八月廿四日

(上杉景勝)  
越 府

(瑞泉寺顯秀)  
佐 運 (花押)

御報<sup>(13)</sup>

これは瑞泉寺佐運が謙信死後、日ならずして敵対行動に出た石黒成綱のことを上杉景勝に報じたものである。同年9月14日付の景勝宛勝興寺佐計書状<sup>(14)</sup>にも、「然者当表之儀、謙信御遠行以来、従木舟恣之働、近辺迄押領無是非候」とあり、成綱の勝興寺に対する積極的な軍事行動を伝えている。勝興寺(当時、小矢部市末友所在)が成綱の夜討により焼かれるのは、2年後の天正9年4月のことである<sup>(15)</sup>。

さて、前記佐運書状にはこの時期の石黒氏内部の動向として重要な部分がある。すなわち、書状によれば、当初織田方の神保長住に属していた石黒又次郎が長住と断交し、井波瑞泉寺にあって木舟の成綱に対抗したものの、その後成綱と和睦し、今は木舟にいるというのである。この又次郎は先にも述べたように石黒惣領家の流れをくむ者であったが、謙信没後、木舟の成綱と共に織田方に付いた。その後成綱への反発からか、上杉方の瑞泉寺に入り、一揆方と共に木舟の成綱に対抗した時期(天正7年8月以前)があったのである。書状の書かれた8月24日の時点では成綱と和睦し、木舟城にいるのであるが、こののち史料上からは姿を消している。おそらく台頭著しい成綱が実質的に石黒氏の惣領的地位についたことを示すのであろう。

ところが、同9年はじめ信長の部将佐々成政が越中に分封されると、越中国内の情勢も変化する。同年3月、上杉景勝は織田方の前線小出城(現富山市)を攻めたものの、佐々勢の来援により撤退する。しかし、これを機に越中の国人のうち、寺崎・寺嶋・小嶋氏らが上杉方に走った。同年5月13日付の上杉部将黒金景信の書状<sup>(16)</sup>によると、砺波郡の上杉方の動きとして「増山なども焼払、木舟計相抱之由申来候」と述べられている。これはそれまで増山城(現砺波市)を守っていた上杉勢が増山



城を自ら焼き払い、そのあと木舟城を占拠したことを示すものと推測される。この時の上杉勢とは、同じ年の7月に木舟城から脱出する吉江宗信らであろう。

この結果、城を追われた石黒成綱らの一行はまもなく信長に呼び寄せられ、近江安土城に向かった。しかし、信長の真意はこの機会に石黒氏を一挙に討滅することにあった。

この時期の信長の国人らに対する施政方針は同10年5月7日付の神戸信孝宛朱印状<sup>(17)</sup>に見られるように、「国人等相糺忠否、可立置之輩者立置之、可追却之族者追却之、政道以下堅可申付之」というものであった。これは信長が四国征討の軍を派遣するにあたり、最高指揮官となる三男信孝に与えた条規の一部である。将来、越中での織田の支配を確立するにあたり、政治的に不安材料となる国人は肅清していくこと——これが信長による国人討滅の背景にあったとみられ、越中石黒氏にはその忠節を問われる重大な疑いが持たれていたことになる。『信長公記』は石黒氏一行の最期を次のように記している。

<sup>(天正九年)</sup>  
七月六日、越中国木舟城主石黒左近、家老、石黒与左衛門・伊藤次右衛門・水巻采女佐、一門三十騎ばかりにて上国。佐和山にて惟住五郎左衛門生害の儀申付けらるべきの処に、長浜迄参り、風をくり罷越さず。然る間長浜へ罷参じ、石黒左近町屋にこれあるを取籠め、屋の内にて歴々十七人生害候。惟住者も、能者二・三人討死候。

このように一行30騎で近江に着いたところ、織田方の気配を察し長浜から進まなかったため、丹羽（惟住）長秀の手の者が長浜まで行き、成綱のいる町屋を包囲して討ち果たしたのである。実は少し前の6月16日にも越中から願海寺城（現富山市）主の寺崎民部左衛門・喜六郎父子が召し寄せられ、近江佐和山の丹羽長秀のもとに身柄を預けられている。石黒氏一行はおそらく長浜付近で寺崎父子のことを伝え聞き、それ以上進まなかったのであろう。寺崎父子は7月17日、佐和山で切腹させられており、石黒氏一行もそのまま進んでおれば、同じ頃寺崎父子と共に佐和山で切腹させられる運命にあったと言える。

ところで、同じ年の同じ時期に越中の国人が二家も信長に討滅されたのは偶然なのであろうか。ここで注目されるのは、石黒・寺崎の居城一木舟・願海寺—がいずれも上方と富山を結ぶ北陸道などの街道沿いに立地することである。軍勢の急速な展開と安定した補給の確保は、統一政権の確立をめざす信長にとって不可欠の要素であり、そのためには交通路が重視された。その点に留意するなら、木舟と願海寺は共に街道沿いの要衝である。両地に将来、寝返りの可能性を残す国人の在城を認めるなら、万一の時には佐々ら織田軍は後方を断たれて崩壊する恐れがある。こうした不安材料を一挙に解決しておくためにも、両国人の討滅が図られたのかもしれない。

ともあれ、当主ら主要な家臣が討たれた結果、越中に残っていた石黒氏の一族は離散・流浪することとなり、以後石黒氏が木舟に復帰することはなかったのである。

### 三 その後の木舟城—上杉・佐々・前田時代—

前述のように同9年5月、木舟城を占拠した上杉勢に対し、まもなく織田勢は攻撃をかけ、7月にこれを攻略している。次の史料はこの時の模様を記した上杉部将吉江宗信の書状<sup>(18)</sup>である。

未申承候得共、以飛脚申達候、仍而拙入身上不思議之就仕合、木船之地ニ籠者致之候、先日以岩船方如申上、如何共罷下度存、様々□□日重番候故、無是非無念千万候、然□□故か、今度木船落居二候間、ちりちり□□妻子無残召連、致渡海候、着岸□□度□□山ニふし欠落

之体ニ而罷越候間、上下以□□召連候間、先延引、從越前所一左右相待申候得共、あまり無音ニ候間、昨日十六罷立、いちふりま□□申候、近日可罷着候、委者以面可申承候、御□□様ニ□□成頼入計候、何様着府之砌、以面□□

(中) 略)  
(天正九年) 七月十七日 (常陸) 入道  
(吉江宗信) 宗 闇 (花押)

樋口与六殿

参御宿所

これによれば、木舟に籠城していた吉江宗信らの上杉勢は落城の際、城を脱出し、海路市振にたどり着いている。おそらくは城の近くから舟に乗り、小矢部川を下って海に出たものであろう。上杉勢の退去により、このあと木舟城には佐々成政が部将の佐々平左衛門（政元）を配置しており、以後、佐々方の有力支城の一つとなっている。なお、木舟城の南東約3kmの地点（現砺波市西宮森）に存在した御館山館は、木舟城の出城的な性格を有していたようであり、木舟の落城直後に焼き払われたという<sup>(19)</sup>。

ところが、上杉方は木舟落城後も依然として越中西部の情勢に大きな関心を寄せていたとみえ、同年8月には次のような指示が上杉景勝から発せられている。

村山孫右衛門所持

中条越前守如注進者、堀久太郎木船へ移之由候間、様子無心元候、各乍大儀、番手替之衆打着候共、四、五日も有滞留、模様聞合帰路尤候、為其一筆遣之候、謹言、  
(天正九年) 八月十七日 景勝御居判

一騎合衆

新保孫六殿

村山善左衛門尉殿

長尾平太殿

(付箋朱書) 「慶長五」<sup>(20)</sup>

付箋には慶長5年（1600）とあるが、中条景泰（天正10年6月魚津城で討死）や村山慶綱などの名から天正9年の書状と考えられる。これによると、魚津城に在番する上杉部将中条景泰が織田部将堀秀政の木舟入城の情報を春日山の上杉景勝に注進している。このため、不安を覚えた景勝がやはり越中に在番する村山慶綱らに交代の番衆到着後も、もう4、5日越中にとどまり、状況を確認してから帰国するよう指示を発しているのである。

堀秀政は信長直臣の旗本（馬廻）として各地へ派遣されているが、今のところ、この時点での越中派遣を裏付ける史料はない。また、上杉側史料にも続報が見出せないことから、結果的に堀の木舟入城は単なる「うわさ」だったとみられる。しかし、上杉側の反応を見る限り、木舟城の動静は彼らの重大関心事だったことがわかる。

さて、木舟城や増山城を拠点化した織田方は同年9月初めより南砺に進攻し、一向一揆の拠点であった瑞泉寺などを攻め落とした。翌10年2月22日付の上杉部将菅名綱輔書状<sup>(21)</sup>には、「從木船向河上ニ、付城取立候処ニ、一二ヶ所押払候由申来候」とあって、織田方が木舟から河上（小矢部川上流域）に向けて出城を築いたこと、そして上杉方がそのうちの1～2か所を攻め破ったことを伝えてい



る。この史料から、木舟城が南砺地域に勢力を保持する上杉方（主に向一揆）への押さえの役割を果たしていたことがわかる。

同年3月、上杉方の国人衆により神保長住が富山城に一時幽閉される事態が発生したが、この一件により長住は失脚し、代わって佐々成政が国内織田方の頂点に立った。成政は同11年8月上杉方を駆逐し、ほぼ越中一国の統一を達成する。しかし、翌12年の小牧・長久手戦を契機に秀吉に敵対し、西の前田利家や東の上杉景勝と戦火を交える。戦いは同13年（1585）8月まで続くが、この間、木舟城は越中西部の守りとして重要な位置を示したとみられる。しかし、8月に秀吉が大軍を率いて倶利伽羅に陣すると、成政は降伏し、砺波郡など3郡が前田氏に与えられた。なお、秀吉軍は北陸道を進んで木舟を通過したが、成政は事前に城から兵を引いており、戦闘は行われなかった。

成政降伏後、木舟城には今石動城から前田利家の弟前田秀継が入った。ところが、同年11月の大地震により城は崩壊し、城主秀継夫妻も圧死した<sup>(22)</sup>。これにより、城下町も壊滅的な被害を蒙ったとみられるが、翌14年5月、上杉景勝一行が上洛のため中田を経由し、木舟を通過した際には、城主前田利秀（秀継の子）をはじめ在城衆が出迎えている。この時の「上杉景勝上洛日記帳」<sup>(23)</sup>には、「（二十七日）同 日本船江御着、同城主前田（利秀）孫二郎其外在城衆御迎ニ被出、御宿禰其外御振舞之結構奔走不及註之」とあり、景勝一行の宿泊が確認できる。この史料によれば、少なくとも天正14年5月27日の時点までは木舟城や城下町も応急的にせよ、一応の修復がなされていたことになる。しかし、これからまもなく利秀は当地での居城を断念し、今石動城に移り4万石を領している。同時に城下の寺院や町なども今石動に移ったため、やがて木舟も農村へと姿を変えていったのである。なお、利秀の今石動移転と木舟の廃城は天正14年中のことと考えられる<sup>(24)</sup>。

#### 四 文献史料からみた木舟城

木舟城の構造・規模などについて過去の文献史料を整理すると、次のようになる。

〔宝暦十四年砺波郡古城跡山塚寺社古跡等書上申帳〕<sup>(25)</sup> など

##### 一、木舟古城跡

木舟村領、本丸南北七拾五間程、東西六拾間程、二ノ丸南北五拾間程、東西四拾五間程、三ノ丸南北六拾間程、東西三拾間程、廻り幅五拾間、三拾間、拾五間程之堀三重御座候、石黒左近殿居住之由、加賀ニ富樫、越前ニ朝倉三兄弟之由申伝候、其後佐々内蔵助殿富山と懸持之处、前田右近様御取被成候由申伝候

〔越登賀三州志 故墟考〕

木舟 又作貴船・貴布弥。在糸岡郷木舟村。城地は同郷岡村の右にして平地也。今大半鋤為田畑。本丸迹と呼ぶ処僅かに方二十四・五間、如平岡。四辺深沼、要害の地也。古城中明神社あり。旧註には本丸東西六十間、南北七十五間、二丸東西四十五間、南北五十間、三丸東西三十間、南北六十間、塹跡三重繞り、幅五十間・三十間・十五間と云ふ。

このうち、『三州志』の記す旧註は前記宝暦十四年書上申帳の内容と同じである。これらによれば、木舟城は基本的に三つの郭（本丸・二の丸・三の丸）からなる平城で、周囲に三重の堀がめぐっていたことになる。このうち、城が複郭であったことは、天正13年の地震の模様を記した「菅君雜録」（『越中志徴』所収）が「木船の城本丸・外廓不殘震込、其形不見」（傍点、筆者）と記することからもうかがえる。なお、『三州志』に記す「本丸迹と呼ぶ処僅かに方二十四・五間、如平岡」とは、現在

も水田地帯の中に微高地として残る「城跡」の規模にほぼ合致し、「如平岡」という記述もほぼ現状の景観どおりである。このことから、現在ある高まりの部分が江戸時代すでに「本丸」跡と呼ばれていたことも明らかとなる。

また、「古城跡略記」は「土居・堀かたち御座候」と記し、江戸期には土塁や堀の跡もある程度形をとどめていたようである。『越の下草』にも、「今は多く田畑と成る。されと封疆（注・土塁のこと）残れり。尤水深なる田地なり。」と記し、土塁が残存していたことを示す。ここにいう土塁とは、郭の周囲に築かれた土塁を指している。

続いて城の立地状況を考えてみる。まず、「古城跡略記」では「中田道之方大手ニて御座候」とし、城の北を通る「中田道」（北陸道）側が大手（正面）であったと記す。このことは、木舟城がやはり幹線道路である北陸道を深く意識して築かれたことを示している。とは言え、防御の方も十分考えられており、周囲には深田や沼などが広がっていた。「古城跡略記」に「廻り深田、近辺足入ニ而御座候」、また『三州志』に「四辺深沼、要害の地也」と記すとおりである。もっとも、そのような軟弱な地盤の上に築城されたことが、地震による被害を大きくしたようであり、「菅君雑録」は「此所往昔沼田にして、其底難知の地なりしを、砂小石等を以て埋之、漸く城地に取立て築城たり。依て今此難あり。外よりも城地の動く事至て強しと云へり」と記す。周囲が沼田どころか、底も知れない所を砂や小石などを入れて埋め立て、ようやくその上に築城したのだという。このため、地震の時には城外よりも城地の方が激しく動いたという。それはともかく、この埋め立ての記事は沼田の中にあえて城地を造成する場合の当時の工法の一端を示すものとして興味深い。

なお、木舟城が平地の中にあって、元は小高い山のようなようであったことを伝えるものがある。すなわち、「有沢永貞頭書」（『越中志徴』所収）には「大地震にて平山城、平地と成也」と記すほか、「三壺記」では地震により「木舟の城を三丈（注・約9m）ばかりゆりしづめたり」とする。3丈という数値はともかく、小高い丘のような地形が人工的に作られていたのかもしれない。東方、新川郡の平野の中にあつた新庄城（現富山市）の場合も、丘状の小高い所に立地していたらしく、元亀3年同地に上杉謙信が着陣した様子を「<sup>（謙信）</sup>輝虎出勢、一昨日十八日者、新庄表山際ニ野陣仕……」<sup>（26）</sup>（傍点、筆者）と表現している。平野部の中では、少しでも高い方が有利であり、そのような地形が城地として求められた。自然地形上無理であれば、土盛りをして、ある程度は高くする努力がなされたと思われる。

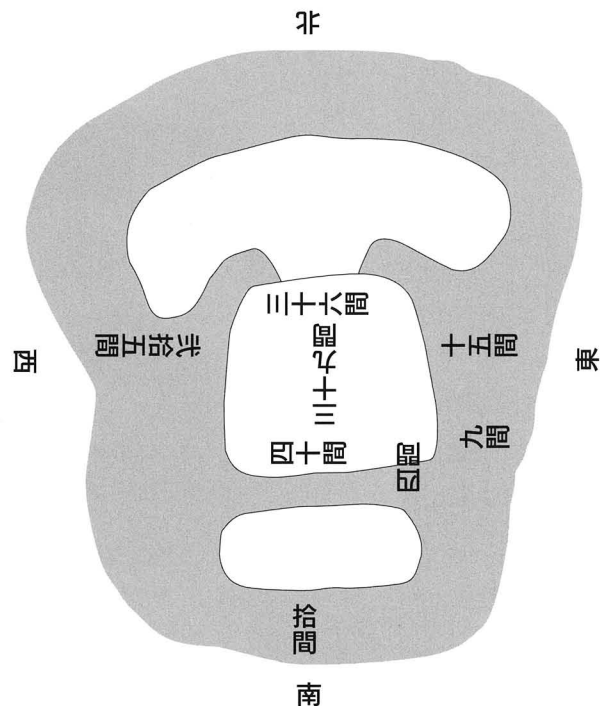
## 五 木舟城のプラン復原

木舟城のプランについては、過去に石黒兵助氏が現在残る東側と西側の微高地部分を中心にそれぞれ本丸、二ノ丸、また両郭から北側に三ノ丸を推定した見取図を作成している<sup>（27）</sup>。また、近年では林寺巖州氏が明治8年（1875）の地引絵図をもとに、東西微高地を含む本丸、その南側に三の丸、また北側に二の丸を推定している<sup>（28）</sup>。

ところで、平成8年、福岡町役場で第1回木舟城跡調査検討委員会が開かれた際、筆者は1枚の古図にめぐり会った。それは福岡町歴史民俗資料館所蔵の杉野文書の中にあつた「木舟古城図」である（第49図参照）。杉野家は現福岡町から小矢部市にかけての地域で十村を務めた家柄であり、同古城図は今石動城跡の見取図と共に雑記帳（～文政年間）の中に収められていた。2枚の古城図はいずれも簡略なものだが、雑記帳の内容からみて、十村が自らの管轄地域内にあつた城跡を何らかの意図で記録にとどめたものと考えられる。古城図の中には一部数値の記入もあることから、江戸時代のある

時期（文政年間以前。福岡町歴史民俗資料館によれば元禄9～12年という）における城跡の推定図として検討に値するものと言える。

では、古城図の内容を見てみよう。第49図からもわかるように、城は三つの郭を南北に連ねる形で構成され、まわりに水堀がめぐっている。このうち、水堀部分は水色で描いてある。このように城が3郭からなるプランであることは、すでに書上申帳などでも見てきたところであり、古城図はそれらの記述を裏付けている。ただし、書上申帳などが記すような三重の堀は、古城図で見る限り存在しない。南北に連なる3郭は周囲を一重の堀によって守られているだけであり、この点が書上申帳などの記述と大きく食い違っている。堀の規模については、中央の郭の東側で15間（約27m、ただし北方部分）～9間（約16m、南方部分）、同西側で25間（約46m）、また中央郭と南郭の間が4間（約7m）、南郭の南側が10間（約18m）と記入され



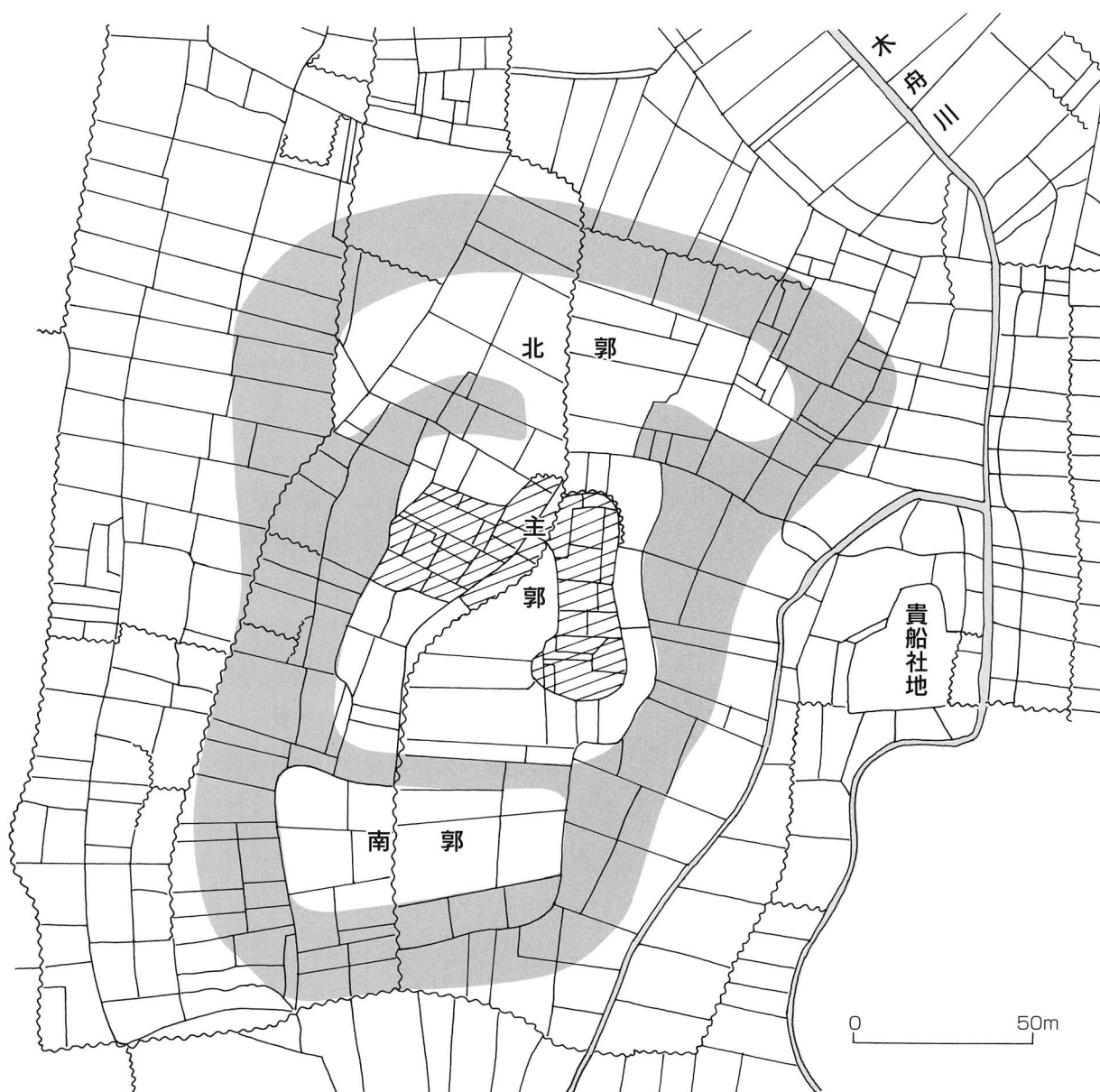
第49図 木舟古城図（杉野文書）

ている。これらの数字を見る限り、書上申帳に記す幅50間・30間などという巨大な堀は存在せず、書上申帳がいう堀とはどこにあったものを指すのか疑問である。かなりの誇張を交えた記述なのか、あるいは周辺部に存在した沼・深田や河川などを堀とみなしたかのいずれかであろう。

一方、郭については、規模がわかるのは中央のやや台形状の郭だけで、南北が39間（約71m）、東西は北辺部で36間（約66m）、南辺部で40間（約73m）と記されている。3郭のうちこの郭だけが長さを記し、かつ中央に位置することから、城内では主郭（本丸）にあたる郭とみてよい。ところが、この本丸の規模についても、書上申帳の数字からみると1/2～2/3程度の小さなものになる。一体、こうした数値の差がどうして生じたのか、今の時点では不明である。なお、古城図によると、中央の主郭と北郭の間は土橋状のものでつながっているのに対し、南郭との間は堀で隔てられている。おそらく木橋で結ばれていたであろう。また、大手口が北方であることからすれば、北方から北郭に進入する施設（木橋など）が設けられていたはずであるが、古城図には何ら手がかりがない。

ともかく、この古城図のプランを明治8年の地引絵図上に落とし想定してみると、第50図のようになる。このうち、北郭については古城図の形にあてはまる地割がなく、かなりの推測によって記入していることを断っておく。

ところで、城跡付近では平成8年にレーダー探査や小規模な発掘調査が実施された。このうち、レーダー探査によって第50図の推定主郭西側で堀跡とみられる幅約30mの落ち込みが確認されている。また発掘調査では、推定主郭の北方で堀跡とみられる落ち込みが確認された。これは古城図に記す北郭の北側の堀にあたるのかもしれない。出土遺物の大半は土師皿、越前焼で、木製品（特に漆椀）も多数出土した。時代的には15世紀後半から16世紀にかけてのもので全体の九割を占めるという<sup>(29)</sup>。これは文献史料から推測される城の存立期間とも重なるものである。



第50図 木舟城プラン復原図（上が北、斜線部分は畑の地目）

## 六 木舟城下町の景観

木舟城を中心に形成された城下町がどのような姿であったのか、当時の史料が残らない今となつては、地名や伝承などからおおよその姿をうかがうしかない。幸い、地元でそれらを収録した資料として『貴船城古今誌』<sup>(30)</sup>や『木舟城の回顧』<sup>(31)</sup>があり、それらを参考にしつつ新たに石黒光祐氏（現福岡町木舟在住）からの御教示も得て、城下町一体の関係地名を図上に記入してみた（第51図参照）。

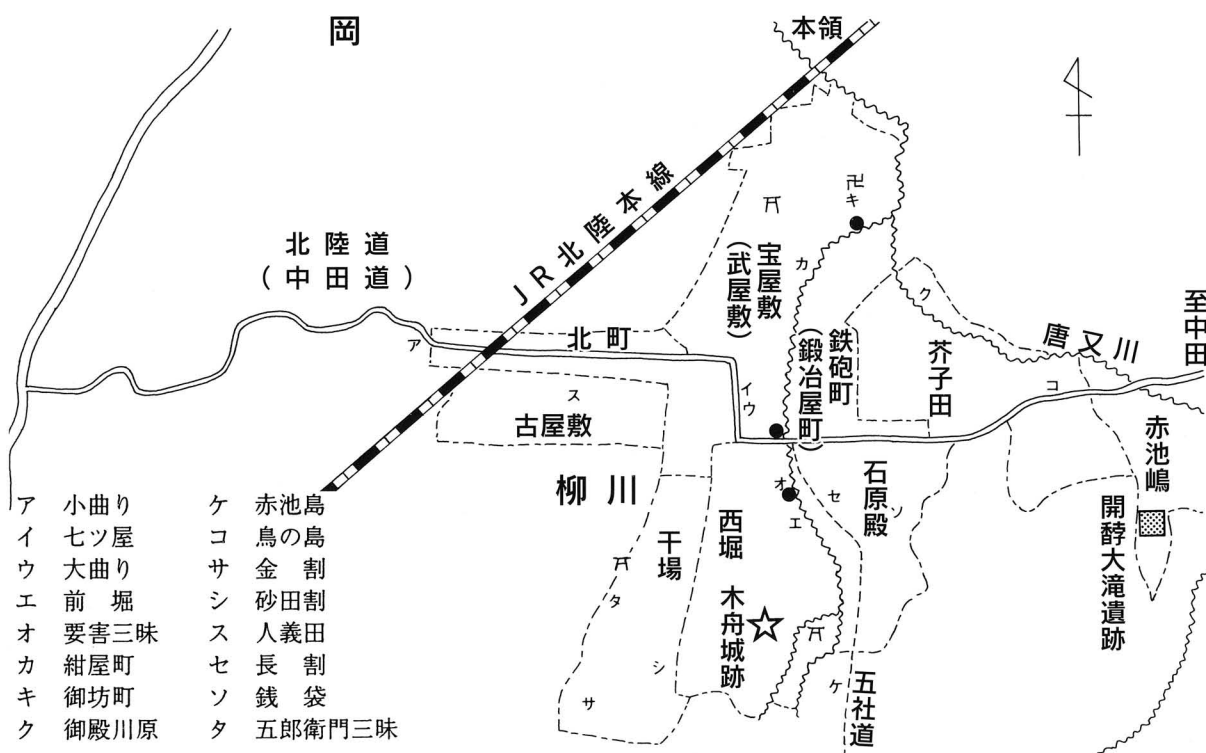
まず城下町付近を通る交通路に着目するなら、北陸道（中田道・中田往来）が東西に走っている。この道は小矢部川右岸道から岡付近で分岐し、戸出・中田方向へ向かうものであるが、岡から城下町西端までの間には著しい屈折を繰り返している。この屈折は城下町を西方からの攻撃から守る人為的な屈折とみられる。その目的は敵が一気に急進撃して攻め込まないようにするためのものであろう。なお、城下町の西口にあたる「北町」西端付近に「小曲り」の地名があるのは、「北町」を直線的に西進した道が町を出たところで北に小さく屈折することにちなむのであろう。さて、この道は城下町の中央付近でほぼ直角に南へ折れ、さらに少し進んで今度は東へ直角に折れる。この大きなカギ形の

屈折はやはり防御を目的としたものとみられ、地元では「大曲り」と呼んでいる。ここには「七ツ屋」の地名があり、茶店もあったと伝えている。注目されるのは、この「大曲り」の南の延長線上に城が位置していることであり、城の大手口と街道のこの箇所が何らかの道で結ばれていたことを示すようである。一方、「大曲り」から東方ではほとんど屈折が認められず、道はほぼ直線的に東方に向けて伸びている。これは西方とは対照的であり、城下町の防衛上、特に西方（加賀側）が警戒を要する方角であったことによる違いなのであろうか。

次に河川として城の東側を北流する木舟川があるが、川沿いに舟着場の伝承地が3か所存在することから、北方の小矢部川との間に水運の便があったことがわかる。また、これとは別に東方の開群付近から流れる唐又川があり、「鉄砲町」北端で前記の木舟川に合流する。東方の「赤池嶋」には中世の町並が発掘されていること（後述）から、そこからの水運の便が考えられる。このように見えてくると、木舟城下町は東西に走る北陸道と南北に流れる河川によって、水陸交通を十分に活用した作りとなっていることがわかる。

さて、城郭に関連する地名としては、城跡付近から北陸道までの一帯を含む「西堀」、さらにその北東の一角に「前堀」という「堀」の付く地名がある。これらは城から見た位置での堀の存在にちなむのであろうか。また、城跡の北に接する現石黒光祐氏宅の屋号を「要害さ」と称し、前記「前堀」付近にも「要害三昧」の地名がある。この「要害」は城郭そのものを指す地名として興味深い。

ところで、家臣団屋敷にちなむものとして「西堀」東側に隣接する「石原殿」や、「北町」南側に沿った「古屋敷」、さらに北陸道北側の「宝屋敷」（「武屋敷」）がある。今、明治8年の地引絵図で見ると、「石原殿」では北陸道から南東に向けて伸びる水路や道路に沿って短冊形の地割が認められる。また、「古屋敷」の中にも東西方向の道路沿いに短冊形の地割がある。「宝屋敷」では南半部の北方に



第51図 木舟周辺の小字・呼称等分布図（●は舟着場跡を示す。）

伸びる道路沿いに短冊形が多く、北半部ではブロック形の地割となる。単に地割からだけで推測することは困難だが、これらが何らかの遺構を反映しているとも考えられる。なお、これらの他、「芥子田」の北端で唐又川の右岸に「御殿川原」の地名がある。城下に多くの家臣団屋敷が存在したことは、「古城跡略記」が「家中侍屋敷多ク御座候」とあることなどからもうかがえる。

町屋の存在にちなむものとしては、西方の北陸道沿いに「北町」（これは城から見た位置を指すものか）がある。ここには街道沿いに短冊形の地割が続いている。「宝屋敷」の北東部には「紺屋町」や「御坊町」があるが、このあたりはブロック形の地割である。「紺屋町」の方は職人町、「御坊町」の方は寺院の存在にちなむのであろう。木舟川の東側にある「鉄砲町」（「鍛冶屋町」）は、鉄砲鍛冶などの職人町にちなむと考えられる。ここでは南半部で北に伸びる道路沿いに短冊形の地割がある。地形上のものとして、城跡東南や城下町東端に「赤池嶋」がある。これは沼などの広がる地形にちなんだものであろう。いずれも城や城下町の外周部を守る自然の要害を形成していたとみられる。

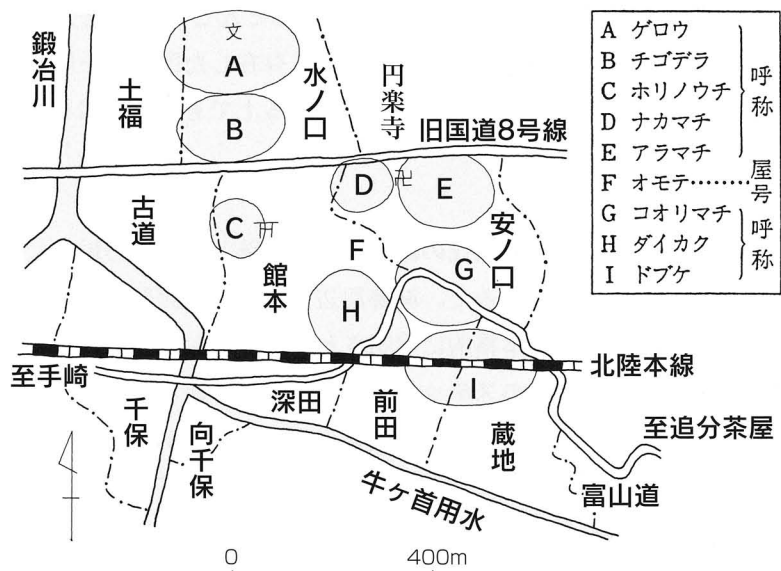
現地の地名や地割から、以上のような城下町の姿が浮かび上がった。ところが、平成5年に行われた能越自動車道建設に伴う発掘調査で、城下町の一部が現実には検出された。このうち、城跡から0.8 km東方で発掘された開群大滝遺跡からは地名や伝承にはなかった中世の町並の遺構が出現した。ここでは南北方向に走る道路跡2本とこれに沿うように4列にわたる建物跡が存在し、約40棟以上の遺構が確認された。東側の道路は幅員約10mで、その中央に溝が存在する。建物は道路の屈曲に合わせて建ち、大部分の建物の棟は道路と平行する形をとる。2本の道路は発掘区外の南北で合流していたとみられ、全体として東西90m、南北220m程度の町並の規模が考えられている。また、2本の道路にはさまれた中央部（建物の背後空間）には畠跡も検出された。町並の東西は川にはさまれており、中洲状の立地である<sup>(32)</sup>。おそらく川岸に舟着場を設けることで、水運の便も利用できたであろう。この付近の小字が「赤池嶋」であるのは、そうした立地状況を物語るようである。また、北で合流した道路はさらに北方で東西に走る北陸道に合流していたはずであり、陸上交通の上でも考慮されている。出土遺物の主体は16世紀代であり、位置からみて木舟城下町の東端を形成する町並であったと考えられる。町並の性格としては、特殊な炉関連遺構が多い点から、鍛冶職人などを中心とした町並だったとみられている。

一方、城跡の約300m北方に位置する石名田木舟遺跡B2地区からは平成6年、南北方向で中央に溝を有する道路（幅約8m）とこの両側に面した建物群が発掘された（中世中層面）。ここは北陸道が大きく南北に屈折する箇所（「大曲り」）の一画とみられ、道路西側が小字「北町」、東側が同「宝屋敷」にあたる。この地区の出土遺物はほぼ15世紀末から16世紀後半のものであり、町屋の形成も15世紀後半から始まったと考えられている。なお、16世紀代に上下2枚の炭化物層があり、2回にわたり焼失したことも確認された。このうち1回は、天正9年7月の織田・上杉両軍の攻防によるものであろうか。また「伊藤小四<sup>(部力)</sup>」など人名を記した木簡も多く出土している<sup>(33)</sup>。

この他にも、城跡の西方約500mの同遺跡F3地区からは15世紀後半～16世紀の身分の高い階層の屋敷跡が発掘された<sup>(34)</sup>。前記の開群大滝遺跡と同様、城からかなり隔たった所にこうした遺構が発見されることは、城下町が我々の想像以上に広範囲に広がっていたこと（城も含め、およそ東西1.2km、南北1kmの範囲）を示すものである。ただし、その内部は地形や自然条件などから、町並や屋敷が散在する景観を見せていたと考えられる。発掘調査による城下町の時期はほとんどが15世紀から16世紀にかけてのものであるが、どちらかと言えば16世紀代が主体とみられ、この頃に城下町の繁栄があったと言える。

## 七 願海寺城下との比較から

先に願海寺城主の寺崎氏が石黒氏と同じ天正9年、信長によって滅んだことを述べた。願海寺城は現在遺構を残さないが、かつて筆者は地名や伝承などから、その城下の復原を試みた<sup>(35)</sup>。第52図はその城下復原図である。これを見ると、願海寺の城下は木舟に比べかなり規模は小さいものの、基本的な景観が実によく似ていることに気づく。まず、城下の中心となる願海寺城跡は小字「館本<sup>たちもと</sup>」にあたる。この中には「ホリノウチ」



第52図 願海寺の小字・呼称分布図

(堀の内) という呼称も残るが、「館<sup>たち</sup>」や「堀の内」は中世城館にちなむ地名として典型的なものである。次に「前田」は城跡の東側に隣接する小字であるが、これは城主の直営田にちなむ地名とも考えられる。また、家臣団にちなむ地名として「蔵地<sup>くらち</sup>」や「ダイカク」、「チゴデラ」がある。これは寺崎氏の家老と伝える蔵地氏や草野大学、家臣の児寺氏にちなむものであり、これら家臣達の屋敷や所領跡を推測させる。他に「ゲロウ」(下郎か) という地名も残る。城跡の東方には「ナカマチ」、「アラマチ」、「コオリマチ」のように「マチ」(町) と称する地名も残り、町屋が存在した可能性がある。なお「館本」の東には「オモテ」(表) という屋号の家が1軒ある。これは、城または城下の正面がこの方角(東)に向けられていたことを示すのかもしれない。

城の防御は西方を流れる鍛冶川や、南方から東南にかけての湿地帯(「深田」・「ドブケ」)によって守られる。これは木舟の場合の木舟川や周辺に存在した深田・沼に相当しよう。無論、鍛冶川についても舟運の便を考えられよう。注目されるのは、城下の南を通る街道である。この道筋は城下付近で著しい屈折を繰り返す、「願海寺の七曲り」と呼ばれていた。こうした屈折は防御のための人工的なものとみられ、木舟の場合の城下西方の屈折や城の大手口付近での「大曲り」に酷似するものである。明治期に書かれた『越中遊覧志』(竹中邦香著)には、「世に伝ふ、これ佐々成政がつくらしめし道にして、このあたり左右深田にして本道の外往還する能ハざるゆゑに、故さらに迂回せしめて、向ふの安養坊の山上より敵の備のやうを見はたさんする為になしゝものなりといふ」という興味深い記述がある。成政が作ったとする伝承は別として、この屈折が軍勢の急進撃を阻むためのものであることは十分推測でき、道路外に広がる沼田とあわせ、防御上の効果を発揮したことは間違いなからう。木舟城下付近の街道の屈折が、この願海寺の場合と同じ目的で作られていることは、以上の点からも明らかである。なお、寺崎氏の居城であった願海寺城の規模や構造については江戸期の『三州志』や書上帳などにも記載がなく、詳細は不明である。ただし、天正9年5月、願海寺城の異変を報じた上杉部将田中尚賢等の連署状<sup>(36)</sup>によれば、「実城」(本丸に相当)と「二之廻輪」(二の丸に相当)の存在が知られ、少なくとも2郭以上の郭からなる複郭式の平城であったことがわかる。

それはともかく、同じ天正9年に落城し、城主がいずれも劇的な最期をとげる木舟と願海寺の城下



(町) が、規模の差はあれ、このようにほとんどよく似たプランを示すことは興味深い。こうしたプランは、戦国末期、越中の平野部の中に存在した国人城下町の典型的な実例を示すものと言え、将来の戦国期富山城下町などの実態を解明する上でも貴重な素材を提供することになるだろう。

## 八 おわりに

以上、前半で城主石黒氏の滅亡までの軌跡とその後の城主について述べ、後半で木舟城そのものと城下町の様相解明を試みた。城跡周辺では今後も開発などに伴い発掘調査が行われるはずであり、城のプランそのものが本格的に解明される日も遠からず訪れるに違いない。筆者のつたない復原研究が、その日に向けた一つのステップとなれば幸いである。

なお、本稿の執筆にあたり、地元の石黒光祐氏からは地名や伝承などについて貴重な御教示をいただいた。また、石黒氏については久保尚文氏から多くの御助言をいただいた。杉野文書の古城図については、福岡町歴史民俗資料館の御協力を得た。さらに石名田木舟遺跡・開醇大滝遺跡については、県教育委員会の池野正男氏・酒井重洋氏・河西健二氏らから御教示を得た。木舟城跡付近の発掘成果を含め、周辺の資料については福岡町教育委員会の栗山雅夫氏の御協力を頂いている。林寺巖州氏からも収集資料の提供を受けている。記して深く謝意を表したい。

### 註

- (1) 高岡 徹「国人寺崎氏の本拠地－願海寺－」（『富山史壇』61号、昭和50年）・同「城下町の形成」（『富山県指定史跡増山城跡調査報告書－よみがえる戦国の山城と城下町－』、平成3年）
- (2) 久保尚文「越中石黒氏について」（『勝興寺と越中一向一揆』、昭和58年）
- (3) 『富山県史 史料編Ⅱ中世』（以下、『県史中』と略す）376号文書
- (4) 『同 史料編Ⅲ近世上』（以下、『県史近』と略す）12号文書
- (5) 『県史中』438号文書
- (6) 註(2)に同じ。
- (7) 「宝暦十四年砺波郡古城跡山塚寺社古跡等書上申帳」（加越能文庫）
- (8) 『県史中』1884号文書
- (9) 加越能文庫
- (10) 高岡 徹「戦国末期における国人領主の在地支配－砺波郡赤丸城主中山氏の場合－」（『砺波散村地域研究所研究紀要』11号、平成6年）
- (11) 『福岡町史』資料編28号文書
- (12) 『県史中』1890号文書
- (13) 同 1933号文書
- (14) 同 1935号文書
- (15) 「勝興寺系譜」（『県史中』古記録）
- (16) 『県史近』9号文書
- (17) 奥野高広『織田信長文書の研究』下巻、1052号文書
- (18) 『県史近』12号文書
- (19) 高岡 徹「増山城と中世の城館」（『砺波市史資料編1』、平成2年）参照
- (20) 「上杉家御書集成Ⅱ」977号文書
- (21) 『越佐史料』巻六
- (22) 『越中志徴』
- (23) 『県史近』145号文書
- (24) 『越中志徴』の木船村の項には、この間の経緯を「昔木船の城下なりし頃は、商家等多く有て繁昌なる地なるが、天正十三年十一月地震にて城沈没し、城主前田秀継君卒せられ、其男利秀明年今石動城へ遷らる。依て此時木船の者挙て今石動へ移り、其より農家のみ残り今に至ると云」と記している。
- (25) 註(9)に同じ。
- (26) 『県史中』1771号文書
- (27) 石黒兵助『貴船城古今誌』、昭和13年
- (28) 林寺巖州「福岡町木舟城跡採集遺物の紹介」（『大境』15号、平成5年）
- (29) 第3回木舟城跡調査検討委員会資料（平成8年12月2日）による。
- (30) 註(27)に同じ。
- (31) 成田忠孝編、昭和35年
- (32) (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『埋蔵文化財年報(5)』、平成6年
- (33) 『同(6)』、平成7年
- (34) 註(33)に同じ。
- (35) 註(1)に同じ。
- (36) 『県史近』8号文書